

一首の強度 駒田晶子

先月の「心の花」時評で少し触れたことを、もう一度。角川「短歌」一月号に掲載された新春座談会について。メンバーは、馬場あき子、永田和宏、小池光、穂村弘、永井祐（敬称略）。〈短歌における「人間」とは何か〉と銘打たれている。座談会の詳細は、図書館などで読めるので、この場で多くは引用しない。

・あはれしづかな東洋の春ガリレオの望遠鏡にはなびらながれ

永井陽子『ふしぎな楽器』（穂村選）

・ここに來てゐることを知る者もなし雨の赤穂にはとり三羽

永井陽子『小さなヴァイオリンが欲しくて』（永田選）

メンバーそれぞれが事前に選んだ「人間が歌われている作品」の三首の中に、永井陽子の歌があった。ここで、小池は短歌の読み、作者である永井の一生をリンクさせる。この人の生涯を知っているから、短歌の透明性が際立ってくる、と。そこで穂村は、その見方に絶望をする、歌のみで素晴らしいというふうになりた、と述べる。座談会の年輩メンバーの発言から、短歌作品にはへ人

間〉の時間が滲んでくるもの。今の若い人は〈へ人間〉をどう考えているのか、同世代ばかりではなく、他の短歌作品にももつと触れてほしい、という思いが感じられた。

わたし個人的話。二十歳の時に短歌と出合ってから、二十年余り過ぎた。始めたばかりの頃、他の人の作品など、ほとんど読まなかった。自分の言葉を吐きだすばかり。歌会に参加するようになってようやく、ただ歌を作っているだけではダメらしい、と気づいたのだった。今の若い人も同じだろう。パソコンや携帯電話など、作品を読んでもらえる場はケタ違いに多くなったけれど、膨大に広がる短歌の土壌に気づき、魅力的だと感じるかどうか。長く短歌と向き合いたいと願うかどうか。座談会を読んだ時は〈人間〉〈時間〉を声高に言いきじやないか、と思ったけれど、やはり短歌のキーポイントなのだ。立ち上がってくる一首の魅力は、あとから知る作者の人生に裏づけされ、深みを増したりもするのだから。